

I セミナーの実施時期と会場および人数

- 1 セミナーの実施：平成14年11月30日
- 2 会場：宮崎中央公民館（宮崎市浄土江町109）
- 3 参加人数：119名

II セミナープログラムと内容

1 報告「ボランティア養成講座のあゆみを振り返って」（要旨）

宮崎県立都城養護学校 PTA ボランティア養成部長 迫田 善子

- (1) 学校と家庭以外の第3の居場所である地域活動は、子どもたちに適度な緊張感を与え、その中で新たな自分を発見することになる。また制約の多い家庭生活と異なり、安全かつ自由に動ける空間で過ごせることが、本人の欲求を発散させ、家庭で親とゆとりのある関係を保てることになる。さらに、ボランティアという第三者と対等に付き合う関係が、子どもに自信を持たせることになり、より社会性を広げる1歩にもなる。このようにボランティアとの地域活動は多くの力を子どもたちに与え、自立を支援することになると考える。
- (2) 知的障害児への支援は、普段身近に接する経験が少ない為に支援の仕方が分かりにくく、子供・親・ボランティアともに不安なことが多い。そのためボランティア養成講座が必要である。そこでのふれあい体験は知的障害への理解を深め、受講生は特別なこととして構えるのではなく、自然に障害者に支援の手を差し伸べていけるようになっていくと思われる。
- (3) 本校の講座は高校生を多く対象としている。これは子どもと年代が近い為、ボランティアでありながら友人関係をつくることもでき、柔軟な感性の中で共に生きるパートナーという関係を築いてくれるのではないかと期待しているからである。また将来、受講生が障害者への理解を持っていることにより、同じ職場の中でジョブコーチとして自然に支援をしてくれるようになるのではないかと考える。このように講座は、大きな視点で障害者児理解の促進につながっていく。
- (4) 今後この講座が、学童保育、ショートステイ、卒業後の余暇活動、ガイドヘルパー、グループホームなどの支援へ広がっていくことを望んでいる。そのために、私たちはボランティアと手を取り合って、試行錯誤しながらでも1つ1つ確実に進めていけるように運営を組織化していかなければならないと考えている。

2 発表「活動の実際及び成果」（要約）

都城養護学校職員 川添 理香

平成12年度から実施してきた本校ボランティア養成講座の3年間の取り組みについて、内容は、順に以下の通りである。①講座を運営していく「組織」の移り変わり（年毎に職員・保護者の数が増えてきたこと、2年目からPTA組織の専門部に「ボランティア養成部」を発足したこと等）、②保護者との話し合いの設定について（月に1回程度、児童生徒が学校に在る間に設定し大まかな日程や活動内容を決める、また保護者だけで具体的な活動内容について話し合いをし、それを受け今度は職員だけで実施が可能かどうか検討するといった方法）、③運営の主体の移り変わり（初年度は企画から運営まで職員主体の講座であったが、徐々に保護者に移行できたこと。将来はボランティアも交えた企画・運営を目指していること）④受講生の参加状況や募集の仕方を説明した。続いて、⑤取り組みの実際を1年ごとに紹介し、3年目となる今年度の取り組みはVTRを交えながら具体的に紹介した。最後に⑥成果と今後の課題について触れた。成果としては、①講座を受講し、今後もボランティア活動をしたいという受講生が多い（今年度参加者の全員がボランティア登録を希望）②参加した本校児童生徒の余暇活動が充実、③児童生

徒を参加させた本校保護者に対し、講座の啓発ができた（「子どもを講座に参加させて、良かった。また参加させたい」との声が多数聞かれた）、④運営の主体をより保護者に移行できた、⑤参加対象者を拡大、⑥マスコミを通じて地域への啓発ができた、の6つが考えられる。一方で、課題としては、①保護者のニーズや児童生徒一人一人の特性に柔軟に対応できるボランティアの養成、②それを受け講座内容の一層の充実、③登録した受講生の活動の場の不足、④更に参加対象者を以下に拡大していくか、⑤今後いかに地域を巻き込み、地域主体の活動に移行していくか、の5つが挙げられる。

3 発表「障害児の地域活動におけるボランティアコーディネートのノウハウについて」 (要旨) 宮崎県立都城養護学校 PTA ボランティア養成副部長 原田忍

- (1) 本校はボランティア養成講座がようやく軌道にのって来たところであるため、全国の先進校の実践例を紹介した Q&A 集を作成し、これを基に地域活動の進め方について説明を行った。
- (2) 障害のある子どもたち一人一人が、各地域の子ども会などに飛び込んでいくことはなかなか難しく、それぞれの障害の特性にあった配慮をしてもらうこともできない。そこで、養護学校が中心となってその専門性を生かし、子どものニーズにあった地域活動を運営していくことが必要である。養護学校は校区が広く、文字通りの地域活動にはならないことも多くある。それが徐々に発展していき、各居住地域での活動になっていくことが望まれる。
- (3) 期日や具体的な内容など地域活動の例について
- (4) 実際の運営者について、養護学校の PTA が中心のところが多いが、ボランティアが企画から携わっているところや、ボランティアだけで運営しているところもある。
- (5) 運営費について、PTA の予算だけで活動することは難しく、参加者から実費をもらっているところが多い。
- (6) ボランティアの募集の仕方について
- (7) ボランティアのマッチングの方法について、参加者1名に対して、ボランティア2名を最低限として、経験の豊かな者とそうでない者との組み合わせにしてマッチングしているところが多い。そのためには参加者の倍以上のボランティアが必要になる。
- (8) 子どもの実態をボランティアに知らせる方法 等

4 ワークショップ「今すぐ始める地域活動を企画しよう！」

・ワークショップ

ブレインストーミング法を用い、ワークショップを行った。目的は、①参加者が地域活動についての具体的な情報を入手したり、交換したりする、②今後の地域活動についての展望を話し合うことで、地域間の格差が埋まるとともに連携が深まり、九州を上げて地域活動が活発になる、の2点である。

時間配分	実施方法 (時間60分)
5分	①8班のグループ(人数12名程度)に分かれる。グループには司会役のチーフ、サブチーフ、記録者が入り、主旨の説明をする。
10分	②「やってみたい地域活動！」のテーマに対して、グループの参加者が2人組になって意見を出し、用紙に記入する。意見は自由な発想で、実現できるかどうかわからないような突飛なものでもかまわない。ただし、他の参加者も意見について批判的に受け取らないように注意し、意見のプラスの面を大事にしていくことを共通理解する。
15分	④集まった意見を内容の同じものや、共通の枠組みでくくれるものご

	とに並べて模造紙に貼っていく。必要に応じて見出しをつける。その中で、それぞれの意見の良さをアピールしたり、わからないところを質問したりする。チーフ、サブチーフも適宜助言していく。意見の方向性を見極めながら、さらに深く考えていきたい地域活動を一つにしぼる。
10分	⑥決定した地域活動について、「子どもたちが楽しく活動するために工夫したいこと！」のテーマでさらに意見を出してもらおう。例えば、体験的な内容を盛り込むとか、ボランティアとの共同作業を取り入れるなど。また予想されるトラブルについての対策や長続きするための運営の工夫なども出してもらおうようにする。
15分	⑦集まった意見を集約して、仲間わけしながら模造紙に貼っていく。必要に応じて見出しをつける。適宜補足説明、意見交換をする。
5分	⑧簡単な意見の総括をチーフが行い、ワークショップを終わる。

以下に、各班のワークショップについて、紙面の都合上、一つの地域活動を決めてから話し合った内容の一部を示した。

1班 テーマ「海遊び（イルカとふれあい、入り江でも遊ぶ）をしよう！」

○どこで遊ぶか？

- ・どうせ行くなら沖縄まで行こう。「少年の船」の障害児だけを集めたバージョンがあるとよい（県費）。そこにボランティア希望者も一緒に乗り、船の中で「ボランティア養成講座」を開講する。等

○安全上配慮すること

- ・必須アイテムとして、テント、シート、簡易シャワー、水分補給用具、日焼け止めクリーム、医薬品、簡易トイレ、救命胴衣など。キャンプ場併設だと使いやすい。→具体的候補地として、須美江（延岡）がイルカも見られるし、地引網体験もできるし、キャンプ場併設で安全に使うことができる。等

○どんな遊びをするか？

- ・宮崎海洋高校に、船上体験（魚釣りも含む）をさせてもらう。等

2班 テーマ「演劇を地域活動で行おう」

○より楽しいものにするためには？

- ・事務局を作る（複数的人数で気持ちを一緒にし、呼びかける）、参加者を募集（メンバーを集める、広く呼びかける）、出し物の選択、障害児の特徴に合わせた配役（やりたがっているものを）、練習スケジュールを作る、役割分担をする、練習場所・発表場所の手配、衣装の準備、企画の経験者を協力者にする（衣装など協力してもらえる人などに声をかけ、人への広がりを目指す）、撮影などを計画的に行っていく。
- ・打ち上げ →参加した全員でお茶会のような打ち上げがしたい。子ども達のやり遂げた！という気持ちを大事にしたい。等

3班 テーマ「友だちと待ち合わせて、駅から電車に乗ってボーリングへ行こう！」

○楽しくなる工夫

- ・ボールが転がせない子どものための板やガーターレーンに落ちないように工夫。
- ・お出かけの意識を持たせるため、おしゃれ（みだしなみ）をしていこう。
- ・移動は小さなグループに分かれて、〇〇時間後にボーリング場集合とする。等

○子どもたちが楽しいとはどんなことだろう？

- ・子どもが、いくつか選択肢のある中から、その子をよく理解している保護者と一緒にどれかを選ぶという自由があること。
- ・学習の要素を含んでいること。休日の活動だから楽しむというだけでも良いのでは？しかしそうしたら、してもらっただけのハードルの低い楽しさになる。

- ・地域活動では社会的なルールを学ぶことも不可欠。しかしそれが全面に出すぎると楽しさが失われてしまう可能性も。ボランティア，保護者，企画者等の事前の話し合いでクリアーできるようにする。等

4班 テーマ「秘密基地作り」

- 子ども達が楽しく活動するために工夫したいこと
 - ・材料を地域のスーパー，木工店などにもらいに行く。
 - ・ボランティアが，どうすればもっと関わり合えるか，楽しいかを考えていく。
 - ・ボランティアが関わる子どもの実態（肢体不自由の子どもがいる，活動的な子どもが多い等）から，活動を考える前もっての準備の時間が必要。
 - ・父親は制作に参加し，母親を出来あがった後に招待するなど保護者も参加する。
 - ・兄弟は，自分の兄弟がいるグループとは別のグループに参加する。
 - ・ボランティアと子どもが一緒になって計画し，前日話し合いには，ボランティアと保護者が参加する。
 - ・危険を伴う道具や材料を扱う祭には，必ずボランティアか保護者が一緒に行く。そういう活動をさせないのではない。等

5班 テーマ「雪で遊ぼう&北国の生活体験（かまくら）」

- 交通・宿泊関係について
 - ・旅行会社との綿密な打ち合わせをする。（学校が修学旅行等で利用している会社や資料を参考にする。）
 - ・JRを貸し切って移動する。（駅員さんに障害児の援助の仕方を伝えておくこと）
 - ・行き先の情報の詳細なものを得る。（バリアフリー，食事，浴場，病院）等
- 防寒対策について
 - ・旅行先の養護学校や各機関との連携が必要。ex) レンタルウェア等の情報。等
- どんな活動？
 - ・スキー，そり，雪だるまつくり，雪合戦など。雪の中でのキャンプファイヤーで輪になろう。雪の中でのバーベキューをしよう！等

6班 テーマ「もちつきをする」

- 楽しませ方の工夫
 - ・地域の老人ホームや保育園等に出かけていってもちつきを行う。その中でいろいろな人々との交流も持てるのではないか。
 - ・地域に出て，地域の畑を借用して大根や高菜などを育て，その材料を使って餅を食べる。地域の方と共に栽培したり道具を借用したりする。等
- 安全面への配慮
 - ・行事保険に加入する。
 - ・実態に応じたグループを編成する。そのために事前の実態調査をしっかりと行う。
 - ・ボランティアの障害者理解のためには，担当を変えていろいろな人と関わる機会を多く設けた方がよい。しかし，障害者自身が活動を楽しむためには，固定してしっかりと実態を知ってもらう必要があるのではないか。等

7班 テーマ「自分たちで行う音楽会」

- 楽しみ方の工夫
 - ・大人が歌う第九に加わって一緒に歌う。
 - ・曲を作ってCDを出したい！！1年に1回健常者と障害者の音楽会をしたい。
 - ・歌，踊り，楽器など，その子どもができる表現をすればよい。
 - ・宮崎で開催の「わたぼうしコンサート」に参加してCD作りに取り組む。等
- トラブル対策

- ・楽器を壊す子どもがいるかもしれないので保険をかける。等
- 音楽会を地域活動にするよさは？
 - ・子どもたちだけでなく高齢者の方や幼児などいろいろな人が関わることになる。
 - ・音楽会を開くという内容は、賛同や協力も得やすい。
 - ・刺激を受けて発語に結びつくなど発達を促す場にもなる。等

8班 テーマ「いかだを作って無人島に行こう」

- 募集・交流について
 - ・ケーブルテレビの放送で企画を紹介する。(スタッフ募集) 等
- いかだの事前学習
 - ・いかだづくりの講習会を開く。
 - ・グループごとにいかだを作り、名前を付ける。(シンボルマーク、旗づくりなど)
 - ・ペットボトルを集め、いかだを作る。
 - ・交流する中で、企画を立て材料の準備や分担をして作業を進めていく。等
- 活動内容の工夫
 - ・魚釣り、潮干狩り、クルージング、キャンプ、天体観測などの楽しい企画をする。
 - ・地引き網をするなど、いかだに乗ることに関連し、自然体験させる。
 - ・保護者、子供、ボランティアで参加してくれる人たちとの交流から始める。等

Ⅲ セミナー参加者のアンケート集約

- 1 セミナーに参加したきっかけ
 - 情報、活動とこれからの方向性、養護学校と地域のつながり
 - ボランティアに参加したい
 - 週5日制になり夏休みなどの長期休暇を含めた休日の活用(親のレスパイトと子どもが安心して過ごすためボランティアの養成は重要な課題)
- 2 参考になった点
 - 地域とのかかわりの大切さ、ボランティア養成講座Q&A集、ボランティア養成講座の企画・運営の仕方
- 3 難しいと思った点
 - 養成講座のパイロット校指定うんぬん無しに、スタートするのはなかなか
- 4 疑問
 - ボランティアが地域で積極的に障害児と関わっていくための受け皿づくり
 - PTAボランティア養成部の保護者(父親)の参加は何人位か?
 - 企画段階での安全確保、実施後の評価の仕方、登録されるボランティアが増えたことを考えると参加する側のニーズが大きいのではないか
- 5 ワークショップでの話し合いにおいて、感じたことを自由に。
 - 自主的に社会へ出ることがボランティア養成にもなり、我が子の喜びとなる。
 - いろいろな立場の方が集まると、たくさんの情報が得られ、企画が膨らむ。
 - 他のボランティア団体との連携、情報収集、関係機関に対しての意見交換の必要性。
 - 学校(教師)、保護者の考えを話し合う必要性。
 - 障害の程度、特徴に応じて、様々な要望がある
- 6 今後このようなセミナーに参加するとしたら、どんな内容がいいか?
 - 地域支援、環境問題、今後の様子、各地域での取り組み、課題、問題点についてについて掘り下げた発表や協議、参加者同士の連携(疑問・悩み等の相談)、実践事例と課題の共有
 - セミナーが多く開かれること

7 提案

- 地域、他団体など多様な関係者に広めるためインターネットの利用（ボランティア募集の呼びかけ、登録、一般の人たちの理解向上、社協からリンク等）と同時に事務処理の簡略化も図る。
- ポイントをしぼった内容（コミュニケーションのとり方について等）にしてはどうか。
- 社協等行政ともタイアップし社協のボランティア養成の一環として活動し地域へボランティアの輪を広げる。
- ボランティア生と討議しボランティア活動・養成のあり方の向上を図る。

8 その他

- 学校と保護者、地域の連携セミナーで理想
- 知的障害者のためのボランティアを養成することだが、ボランティア養成を学ぶ方は、他障害への理解も必要。
- 環境作りを私たちが地域に向け発信することで、障害を持つ子ども達をもっと知ってもらえると実感した。ボランティアの参加も、小・中学生でも出来ないものかと感じた。
- 資料配布

IV 各学校ごとにその県を含めての地域活動の展望

今回、ボランティアコーディネーターセミナーを開催するにあたり、県内への案内を、知的障害養護学校はもちろん、社会福祉協議会、特殊学級を併設する市町村立小・中学校、保健所、児童相談所、育成会など計 411 の団体に配布した。その結果、参加者の約 8 割が本県からの参加であった。内訳は、職員、保護者、社会福祉協議会職員が多く、中には肢体不自由児者父母の会の方や県立高校職員、役場職員の参加もあり、幅広い職種の方々の参加があった。このことから、知的障害養護学校のみならず、各関係機関、ひいては子どもを取り巻く本県のそれぞれの地域が今、障害児の地域活動に関心を寄せていることがわかる。換言すれば、自分の地域でも障害児の地域活動をすすめたい、でもどのように進めたらよいかかわからない、そのノウハウが知りたいといった参加者の思いが届いてくる。

しかし、アンケート結果を見てみると、今回のセミナー開催が、そうした参加者の地域活動に対する関心を更に深め、実現に向けての第 1 歩を強く後押ししたことが感じられる。本校は、3 年前にパイロット校の指定を受けたが、ボランティア養成講座はまさにゼロからのスタートであった。よって、今回パイロット事業校として、各地域に先進例を提示するには必ずしも十分な状況とは言い難かったが、本校が試行錯誤してきた現状を等身大で（ありのまま）伝えることで、ボランティア養成講座の必要性や具体的にどうすればいいのか、また実施においての工夫や問題点等を、参加者はそれぞれの立場や環境で見つめることができたのではないだろうか。アンケート結果の中には、「今回のようなセミナーに、また参加したい。地域活動を是非実施できるようにしたい。」という意見が多く、今後も障害児の地域活動を促進するためのセミナーやボランティア講座が、必要とされていくのではないかと考える。

本校においては、地域活動はまだ駆け出しの状況であるが、講座を実施する中で出会った、児童生徒のきらきら輝いた笑顔を思い出しながら、3 年間の取り組みで得た成果と課題にしっかりと向き合い、いまできることから探っていきたい。その立役者として、これからは、地域の社会福祉協議会や行政との連携を図り、障害児・者が地域の中で生き生きと活動できる環境作りに努めていきたい。そして、また、参加者の方々とこのようなセミナーを通じて、お互いの実践事例や成果、課題の共有をできる日がくることを期待している。そうした日が来るのも、そう遠くないのではないかと感じている。